学際誌『史林』——地理学の立場から

金田章裕

一　『史林』と地理学の学術雑誌

史学研究会編『史林』は、一九一六年に第一巻第一号が刊行された。二〇一七年には、第百巻が刊行されている。史学研究会は言うまでもなく、京都帝国大学文科大学史学科を母体として設立された。現在でも副題に「史学・地理学・考古学」と表記しているように、史学系の総合的な学術雑誌として、刊行され続けてきた。

文科大学の創設は一九〇六年であり、史学科の各講座の開設は翌年九月であった。史学地理学第二講座の初代教授であった小川琢治は、『史林』の第一巻第一号に、各分野からの論文計一〇編の内の一編を寄稿した。以後、類似の構成が続いた。

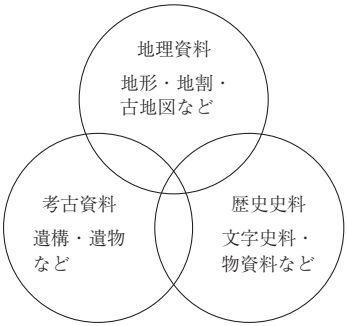
一方、一九三二年には、京都帝国大学文学部地理学教室編『地理論叢』第一輯が発刊され、以後、年一冊の刊行が続いたが、『史林』との関係に大きな変化はなかった。『地理論叢』は第一三輯（一九四五年）まで刊行された。この間、一九二五年には日本地理学会によって『地理学評論』（第一巻上）が刊行され始めていた。戦後間もない一九四六年に西日本地理学会が創設され、一九四八年には改組・改称されて、人文地理学会となった。人文地理学会編『人文地理』が創刊されたのはこの改称の年であり、①現在までに第六九巻までが刊行されている。地理学の論文の多くはこれらの雑誌に掲載されているが、『史林』もまた引き続き、地理学とりわけ歴史地理学にとって主要な学会誌の一つである。

二　『史林』：学際誌の意義

すでに述べたように『史林』は、「史学・地理学・考古学」を副題とする学際誌である。周知のようにカント（I. Kant）は、歴史学を時間的に継起する事象を扱う学問、地理学を空間的に並

存する事象を取り扱う学問と定義した。理論的にはこの定義は有効であろうが、実際に地表で継起し、存在する事象は、時間的存在であるとともに、同時に空間的存在でもある。歴史地理学という小分野が、歴史学側からも、地理学側からも設定されるといった状況を想起すればこのことは極めて容易に理解される。そもそも先に述べた史学地理学第一講座が西洋史学、第二講座が地理学という形で発足したこともこのことを反映している。その意味では、『史林』は史学の多角的方法の展開の場、あるいは史学関連分野の学際的思考の場として機能してきた側面があり、そこに一つの大きな価値があると言えよう。

例として言及した歴史地理学の立場からすれば、その分析の基礎となるのは地形・地割・古地図など地理史料とでも表現できる資料群だけでなく、文字で表現された史料や各種の物資料など歴史資料群と認識されることが多い史料や、遺構・遺物など考古資料群など多様にならざるを得ない。この状況は、図のようなヴェン図式で表現される関係となろう。[2] 歴史学・地理学・考古学は、多くの分析対象と、そのための資料を共有している部分があることになる。とすれば、これら三者の研究成果は、相互に共有され、相互に検証されることが望ましいことになろう。『史林』はこの意味でも学際的な読者を得て、その評価を得ることができる恵まれた場を提供することとなる。



地理資料・考古資料・歴史資料のヴェン図式

三　社会的要請と人文学

『史林』とその発行主体である史学研究会の研究者は哲学・文学等の研究者とともに人文学の研究に携わっていることになる。人文学は人間の研究、文明の研究、文化の研究、それらを生み出した時間と空間の研究に携わるのである。人文学のみに限られないとはいえ、現在とりわけ、人文学そのものを取り巻く社会的環境が大きく変化しつつある。研究と研究者養成に専念すべき大学においてさえ、そのための継続的な人的・財政的な体制に危機的状況が訪れているといっても大げさではないであろう。[3]

近年目立つようになった、人文学への社会的要請（行政的要請を含む）は次の三点に集約されるようである。

（1）目に見える形での成果の期待

（2）自然科学系・工学系プロジェクトへの参加の期待
（3）評価指標の確立

目に見える形での成果の期待　成果への期待が寄せられるのは、人文学にとっても当然のことながら、むしろありがたい状況でさえあろう。しかし問題なのは、それが短期的に求められる風潮が強まっていることである。人文学においても課題によっては、プロジェクトの予定通りに進めば一定の成果が期待できる課題も存在する。しかし一方、人文学の始原以来の課題もあって、すべてが期限内に完結するわけではない。

この状況にあって、短時日あるいは一定の期限内に成果を求めることは、その期間に適合した小型の成果を小出しにすることに結びつきかねないことになる場合がある。この場合に危惧されるのは、一旦出した小型の成果に安住したり、一旦出した小型の成果が実は作業過程の一つであって、その後の研究を制約したり、それと齟齬をきたしたりした場合である。個別の大学を特定するわけではないが、例えば近年の学位論文のテーマを見ていると、課程博士の論文提出のために、限定された時間に見合った研究テーマを選んだのではないかと邪推したくなることすらある。

目に見える形での成果とは、往々にして「すぐ役に立つ」研究成果を求める風潮とも軌を一にすることが多い。人文学を「虚学」と位置付けた、かつてのストイックな姿勢を固持するわけではないが、すぐ役に立つとは、すぐ役に立たなくなる、との同義であることが多い。

それではどう対処すべきか、という問いに直面することになるが、おそらくその一つの可能性は、研究成果の「熟成」の重要性を再認識することにあるかもしれない。『史林』がその姿勢を保持することは、少なくとも大きなよりどころとなるであろう。人文学にとって、文章、思考、論理等を含む、成果の熟成が極めて重要であることは論を待たない。

自然科学系・工学系プロジェクトへの参加の期待　学際的研究あるいは「文理融合」といった表現による、人文学といわゆる理系・工学系との共同研究の必要性ないし要請が大きくなって久しい。確かに一部の分野では文理融合はすでに不可避であり、それが有効である限り、それは当然の方向性であろう。例えば医学の進歩に伴う医療倫理の必要性や、著しく進展した脳科学と心理学など、その例も多い。しかし、このようなプロジェクトが研究の進展にどのように結び付くのかについては、疑問を抱かざるを得ない例もある。

人文学が求められているのは何なのかという点を自省する時、どうしてもいくつかの迷いが生じるのが一般的である。すでに熟成した人文学の成果の応用の要請なのか、基礎教育・基礎的姿勢への関与の期待なのか、あるいは新しい成果を求めた真の意味での参画の要請なのか、といったところが問題となろう。程度の差はあれいずれも一定の意義はあろうが、求める成果に向けての日程上の要請と合致させることが難しいことは、前段の「すぐに役に立つ」という議論でふれたところと軌を一にする。また、熟成した成果を基礎とする方向であったとしても、出発点ないし議論を噛み合わせるために、用語の定義から議論する必要が多いことなどは事実である。ましてや、熟成していない小型の成果を求められるような場合など、すでに述べたような問題も派生しかねず、その位置付けにはどうしても苦慮させられることになろう。

これらの積極的ないし必然的場合は別として、単なる文理融合の形をとるというだけであれば、もとより意味がない。自然科学系・工学系プロジェクトへの参加の期待がプロジェクトそのものの意味ある成果に結びつき、かつ人文学にとっても突破口ないし進展の糸口となるのであれば幸いである。そのような例は多くないというのが現状であろうが、ただ、その可能性を模索する姿勢は必要であろう。もとより、人文学の側からの自生的な必要性での、自然科学との共同を進めることには、当然積極的であるべきであろう。

評価指標の確立の功罪　昨今の予算システムにおいては、プロジェクトの意義や成果の評価が求められるのがすでに一般的である。このシステムと継続的予算の必要性が高い人文学の特性とは、相容れない場合が出現することはすでに述べた。

人文学の研究プロジェクトには、プロジェクト自体が有効な例があることはすでに述べたが、それらは評価についても容易であり、また評価が明確であることが多い。しかし人文学全体とすれば、評価システムが有効とは言えない例が多い。さきに「小型の成果」が問題を惹起する可能性を指摘したが、評価もまた、評価しやすい小型の成果を量産することに結びつくおそれがあると言えよう。評価しやすい成果、小型の成果は、同じ文脈で、評価しにくい成果、大型の成果こそが意味の大きい人文学にとって、その阻害要因になりかねないのである。

評価と言えば、自然科学系・工学系や一部の社会科学にとって、最も一般的なのはサイテーション・インデックスであろう。人文学研究者ではないものの、人文学の価値と必要性を理解している人々であっても、そのような形式的評価基準はないかと模索して

いることは多い。しかしそれは可能であろうか。また、有効であろうか。

人文学の対象は、人や場所、あるいは時間や文化であり、いずれも言語と分かちがたく結びついている。日本では人文学は、一般的に日本語を基礎としていることは言うまでもない。人文学がこれらの広義の文化を対象としている限り、言語と切り離して考えることができない。また、この要素が人文学の大勢を占める限り、人文学は一般的な形式的評価規準とはなじまないといってよい。

しかも人文学にとって必須となる要素の一つは、すでに述べたように「熟成」である。文章、思考、論理等の熟成こそが、人文学の質を決定する。この点からも、形式的評価規準とはなじまないと言えよう。

以上のように、社会的要請には妥当な部分もあれば、時として人文学そのものの方向性と齟齬をきたす場合もある。

『史林』の使命はおそらく、熟成した研究成果を刊行し続けることにこそあろう。それが社会的要請に対応してゆく意味でも、本来の人文学を推進していく意味でも基本となると思われる。

① 京都大学文学部地理学教室編『地理学　京都の百年』ナカニシヤ出版、二〇〇八年
② 金田章裕『古代中世遺跡と歴史地理学』吉川弘文館、二〇一一年
③ 金田章裕「大学改革と人文学の課題」『ＩＤＥ現代の高等教育―「大学改革と人文学の危機」』四八五、二〇〇五年

（京都大学名誉教授）